

明暦が日本で施行された時代の暦日を計算される基礎となったものである。授時暦に関しては同じく1969年の『東京天文台報』に発表されたものがあり、関孝和の授時暦研究を中心とした研究で、関孝和のこの研究が和算史の上で重要な意味を持つことを注目された重要な論文である。授時暦について思い出すのは、達藤利貞『日本数学史』に朝鮮の学者容螺山が日本人に授時暦を教えたと

いう記事がある。私は容が学者の姓であると思っていたところ、『通航一覽』64の寛永20年朝鮮使随員の中に「進士安期、号螺山」とあるのによって、容は客の誤りであることを、廣瀬さんから教えられた。多くの点でご教示を受け、今後も長い交友をと思っていた廣瀬さんを失い寂寥の念一人である。ご冥福を祈る。合掌。

(1981.11.19)

廣瀬さんを憶う

清水 彊

廣瀬さんにはここ数年来お目にかかる機会がない儘に過ぎてきたが、私の記憶の中のお姿はいつも元気そのものであり、俄かに幽明を異にすることとなろうとは、全く思いも及ばぬことであった。茲に、編集者からのお求めに応じて、廣瀬さんを偲ぶ私の思い出の一端を記してみよう。

私の大学入学は昭和6年であるが、その時廣瀬さんは後期(3年)学生であった。当時の天文学教室は麻布狸穴の旧東京天文台跡であったから、廣瀬さんとの出会いもここからである。今では全く姿を消した手廻しのモノロー計算器を動かし、彗星か小惑星かの軌道計算を精力的にやっていた頃の廣瀬さんが、今もなお目に浮ぶ。その計算器のあった学生控室の奥が平山清次先生の研究室であったから、廣瀬さんは計算器の騒音を慮り、計算は殆ど夜間に取組まれ、徹夜も屢々であったらしい。計算が苦手であった頃の私には、このような廣瀬さんは大きな驚きであった。

廣瀬さんは大学卒業後、神田茂氏の下でわが国の天文学史料の蒐集に当られた。その間の経緯は存じ上げないが、このことが晩年の天文学史研究の基盤となったと思われる。三鷹の天文台に勤務されたのは、ブラッシャー天体写真係係りとしてであり、及川奥郎氏を助けて小惑星や彗星の観測に専念された。相前後して、当時の天文台長関口鯉吉先生の下で26吋赤道儀系の1員となった私は、5ヶ年間天文台で廣瀬さんと親しくお付合い戴けることになった。その間の思い出の1つは、関口先生が私に命ぜられたので、廣瀬さんの援助を得て試みたブラッシャー写真乾板による恒星固有運動の測定である。それには、同一写野を年数を隔てて撮影した新旧2板の乾板を膜面接密にして測定することが望ましいので、廣瀬さんには出来るだけ古い損傷のない乾板の選定と、同一写野での膜面裏返し撮影とをお願いしたのだった。測定の結果については、当時の天文台報に報じたので省略しておく。

昭和23年になって、廣瀬さんはわが国における月の掩蔽観測や子午環観測の結果が、世界一般のそれと系統

的な差違が見出されるのは、わが国の測地原点が持つ垂直線偏差の影響であると推論された。そして、同年5月9日に起るであろう金環食の中心線の位置には、上記偏差に相当する修正が必要と提唱された。礼文島における当日の金環食はほぼ廣瀬さんの予報位置に見られ、その推論の妥当性が実証された。この研究が廣瀬さんの学位論文となったと思う。

その後昭和31年になって、廣瀬さんは更に前述の天文観測の結果から、わが国の測地座標の基準であるベッセル地球楕円体への補正値を誘導された。そして、以前に熱海氏や川畑氏などが発表されていた同じ補正値は、その符号が間違っていることに気付かれ、私にもその確認を求められた。早速調べてみると正に指摘の通りであった。この符号の誤りについては、廣瀬さんの原論文を読んだ人達には周知であったが、昭和49年に古在氏との連名で測地学会誌に再指摘をされている。

廣瀬さんの天文台長就任は昭和38年4月から同43年11月までであるが、その間直接助言を戴いたのは、恒星天文学研究会(SAM)の人達の間で、わが国でも大型シュミット望遠鏡による観測的研究を進めるべきだとして、昭和40年来討議を重ねてきたその設置計画についてである。廣瀬さんは、東京天文台でも大型シュミット望遠鏡の建造が年次計画としてあるので、SAM案が現実的で天文台案に調整ができれば、その設置の実現は期待できるし、また実現後に共同利用への開放も可能であろうから尽力する、と示唆されたのであった。東京天文台の口径105 ㎝のシュミット望遠鏡が木曾観測所に建造されたのは、昭和49年10月であって、その間天文台長は古畑正秋氏を経て、大沢清輝氏に代っていたが、いずれもSAMの討議への理解を戴くことができ、共同利用に開放されている。

廣瀬さんとの最後の関わりは昨年である。私の天文台時代にダンジョン・クーデの Lunettes et Télescopes を丸善で買求めたが、天体観測者にとって参考になる事柄が記述されているので、廣瀬さんにもお見せした。この

書物の第5編は望遠鏡の歴史に当てられていることを、廣瀬さんは記憶されていたと見え、昨年この本を借用したいとのことであった。早速お送りしたところ、間もなくこの本の返送とともに、「天動説から地動説へ」の著書

を戴いたのであった。

以上のほか、廣瀬さんに纏わる思い出は尽きないが、これで筆を措き、謹んで御生前の御厚誼を謝して、遙かに御冥福をお祈りする次第である。

廣瀬さんのこと

古 在 由 秀

廣瀬秀雄さんは1981年10月27日の夕方、肺炎のため亡くなった。入院中ではあったが、そちらの方は回復に向っていた最中で、病院中でこのようにして亡くなると思ひもよらなかった。我々の知っている東京天文台在職中の廣瀬さんは大病をされるということもなかったが、若い頃に当時の例として肺の病気をわずらわれたらしい。その後、医者というものに全くかかれなかった方だが、この若い頃の病気が間接的な死因となったとのことで、普段から養生をしておられたらもっと長生きをされたのにと残念でならない。

我々の知る限りでも非常に物知りの方であった。その知識は各方面にわたり、いわゆる雑学の大家でもあった。私達が東京天文台にいられた頃は、廣瀬さんもあまり忙しいというわけではなく、面白い珍らしい話をいろいろきかせてくれた。そんな楽しい時間も、当時の若先生方が天文の問題で質問にみえて、中断になることが多かった。天文学でも廣瀬さんの専門は多岐にわたっていた。

廣瀬さんは小さい時から天文がすきで、いわゆるアマチュアであった。大学では迷わずに天文学を専攻された。東京大学を昭和7年に卒業されたが、同級生の一人が、緯度観測所におられた服部忠彦さんである。大学を卒業されても職がなく、大学院に入られたが、大学院には5年以上も在学された。今と違って、大学院のための授業などなかった旧制の時代である。

大学院の時代には、東京天文台に来ておられ、神田茂さんと一緒に仕事をしておられ、神田さんの官舎で寝泊りまでされていたらしい。この時代のお仕事は、彗星や小惑星の軌道計算、小惑星の同定などで、また、神田さんの明治前天文学史のための資料集めを、東大の史料編纂所でされていた。

東京天文台に職を得られてからは、及川奥郎氏のもとで、ブラッシャー写真機による小惑星の位置観測に従事された。現在ある天体掃索部の前身为天体写真係である。このブラッシャーで平山信先生や及川氏が小惑星をいくつか発見されたもので、廣瀬さんもこれで観測をするかたわら、小惑星の計算も続けられた。第2次世界大戦後に、廣瀬さんは国際局からいくつかの小惑星の予報の計

算をたのまれ、竹内端夫、石田五郎、高瀬文志郎、北村正利さんなどとこれを担当された。

廣瀬さんの名前が世間で有名になったきっかけは、日本の測地原点での鉛直線偏差の値を、掩蔽の観測から求めた仕事である。その値によって経度緯度を補正して観測地をえらび、日食帯の非常にせまかった1948年5月の礼文島での金環日食が成功したことは、当時多くの新聞でとりあげられた。この値をもっと正確に知ろうと、東京天文台では掩蔽の光電管観測がはじめられた。1P21という光電管がとても高価な時代で、大沢清輝さんとはとより、海野和三郎さんなどもこれに従事しておられた。我々も、この測地利用のための試験観測にかり出され、水路部や国土地理院の人達も一緒に仕事をしていた。これが実用化され、太平洋の島々にまで観測班がおり出されてしばらくして人工衛星があがり、人工衛星が掩蔽にとって代った。

廣瀬さんは、また戦事研究としてシュミット・カメラの研究にかりだされた。廣瀬さんはこり性であったから、この研究を通して光学の大家になられた。岡山の74インチ、36インチなどの建設にあたっての、廣瀬さんの貢献はとても大きい。とくに、岡山や堂平の36インチは、日本ではじめて作られた大きな望遠鏡で、廣瀬さんの存在なくては、その建設にふみきれなかったのではないかとさえ思われる。

東京天文台に計算機を導入することに力をいれられたのも廣瀬さんで、台長時代に実現した。廣瀬さんは計算の達人でもあった。廣瀬さんはいわゆる外国留学というのはされなかったが、昭和35年前後、文部省在外研究員として、アメリカ・シンシナチー大学天文台のハーゲット台長のところに2ヶ月ほど滞在された。ここには小惑星の国際中央局がおかれており、ハーゲット氏と親交をむすばれていたが、ハーゲット氏も8月に亡くなった。廣瀬さんは理学部で軌道論、後には天体力学の講義をされていたが、私は軌道論の講義を受けた。その頃、同じ講義を日曜日にアマチュアの人達をあつめてされており、その講義録がアマチュアの人達によって作られ、広められた。これは名著である。

私事であるが、私は大学卒業後、廣瀬さんが指導教官